

侯乃陳宮の前より金龍院へ行幸の
うへに小御所なる石あり世に三嶋
明神と云ふ所も勧修寺の時心川を
りて白幣を垂れしに此石の上なる
所より水あり常石と名付てこゝより
なるかのありふをこの所の亭に
まゐりて一観を令し中へ八景のさ
まゝなりと云ふ

百千度 見るともあかじ 金沢や

此の所の坂道なり。右の方に鼻かけ
地蔵とて石の仏あり。武蔵相模の
さかいとかや。弘法大師の作り給ふといふ。
此峠にてしばらく休らひ、又まがりく
て麦はたを過、梶原の屋敷あと、ほく焼
あみだ、せん水川を渡り、杉本の観世音に
詣つ。坂東一番の札所なりとぞ。哥の橋を
わたり、えがらの天神の御社にまつ。

侯の陣宮の前より金龍院へ行。堂の
かたはらにおほきなる石あり、むかし三嶋
明神を此所に勧請せし時、いつち
よりか白幣飛来りて、此石の上にたてり。
さるゆゑに飛石と名付とかや。こゝより
はるかにのぼりてひとつの詠の亭あり。
昨日見し一覽ていとほまた八景のさま
かはりて、いとあおもしろし。

百千度 見るともあかじ 金沢や

とりならべたる やつの名所

少しくおりて竜灯の松あり。坂をおりて
此寺を立出。左りのかた塩場有。それより
田畑の中を過て朝比奈の切通しに
かゝる。この所坂道なり。右の方に鼻かけ
地蔵とて石の仏あり。武蔵相模の
さかいとかや。弘法大師の作り給ふといふ。
此峠にてしばらく休らひ、又まがりく
て麦はたを過、梶原の屋敷あと、ほく焼
あみだ、せん水川を渡り、杉本の観世音に
詣つ。坂東一番の札所なりとぞ。哥の橋を
わたり、えがらの天神の御社にまつ。

大とつたま乃ち法軍は石の方頼朝公
 屋敷跡、今は畑となれり。大くら、この處
 町家有。筋違橋、宝海寺前、北条ならびに
 頼つね將軍屋敷跡、鶴が岡三の鳥居
 前、雪の下なる大沢にてしばし休らひ、
 安ない子を伴ひて赤橋といへるを過ぐ。
 こゝに左り右にわかれて紅白の蓮池あり。
 右のかたに嶋三つ有。その中に弁天の社有。
 いにしへは島四つ有しを、義經公八嶋出陣
 の折、切かたんとて一嶋をきり崩し給ふ
 よし。左りの白はすのかたは四嶋あり。池の
 廻り松の木なみたてり。二王門は三ツ棟
 づくり、此二王尊は雲慶の作といふ。左りの
 方護摩堂、不動尊を安置せり。大山の
 不動尊と同じ作の由。昔平家追討の
 とき、この御堂にて文覺上人にこつふくの
 祈りをせさせ給ひしに、左りの方の童子、青
 牛に乗給ひしが、こつふくかんおうのしるし
 にや、前のひさを折しといふ。正面神樂殿、
 右に大塔、五智ぼさつを安置せり。同じ
 所にしゅろつ、又臥竜柳あり。そのさま

いふに、はさこそと思はるれ。なほ右のかたに
姫石大明神とあがめし大石有、是を
いのる時は、こしよりしもの病を治すといふ。
夫より右のかた、社地を出て畑を過れば
寺有。門前に天正といふ年の御朱印の
制札建たり。本尊は十一面観世音を
安置せり。堂の前に由井の長者の七所に
たてしといふ塔一ッたてり。其娘の七つに
なりけるが、鷲にとられて鎌倉の府の
中に七所血を落したるに、其ところに
たてしとぞいふ。此長者は北条家六代の
ころの人なりとかや。夫より尚坂をのぼれば、
頼朝公の五輪の塔有。玉がき、鳥居は寛永
の頃、薩摩の太守より寄附せられし
よし。右のかたの坂をのぼりて、大江広元
治津忠久の墓へまいる。また元の社地に
いりて、右の方に薬師堂有。神功皇后を
勧請せし由。若宮八幡宮の御やしるに
まうつ。此御神は仁徳天皇を祝奉る由。
もとは由井が浜に有しを、こゝに移し
奉りしといふ。此御社にて昔頼朝公の

いにしへはさこそと思はるれ。なほ右のかたに
姫石大明神とあがめし大石有、是を
いのる時は、こしよりしもの病を治すといふ。
夫より右のかた、社地を出て畑を過れば
寺有。門前に天正といふ年の御朱印の
制札建たり。本尊は十一面観世音を
安置せり。堂の前に由井の長者の七所に
たてしといふ塔一ッたてり。其娘の七つに
なりけるが、鷲にとられて鎌倉の府の
中に七所血を落したるに、其ところに
たてしとぞいふ。此長者は北条家六代の
ころの人なりとかや。夫より尚坂をのぼれば、
頼朝公の五輪の塔有。玉がき、鳥居は寛永
の頃、薩摩の太守より寄附せられし
よし。右のかたの坂をのぼりて、大江広元
島津忠久の墓へまいる。また元の社地に
いりて、右の方に薬師堂有。神功皇后を
勧請せし由。若宮八幡宮の御やしるに
まうつ。此御神は仁徳天皇を祝奉る由。
もとは由井が浜に有しを、こゝに移し
奉りしといふ。此御社にて昔頼朝公の

義経の御前には法樂の舞を乞給ひて、義経の
 行へを尋とひ給ひしとや。夫より経堂
 に参る。もろこしより七千巻の経文を
 奉納ありしを、八角輪藏にをさめし
 よし。こゝを出て八幡宮の石段、はゞ五間も
 有べし。十間余りのぼる。左りの下に隠れ
 いてうとて大樹あり。むかし若宮の別當
 公暁、伯父実頼公を親の敵とて、此いてう
 の陰より出てうちまいらせしよし。北條
 義時のはからひなりしとか。石段をあがれば、
 右に鶴亀石・影向石とて三つあり。猶
 右に六角堂あり。隨身門は是も雲慶
 のつくれりといふ。朱に金銀をちりばめ
 たるみやしろのたふとしと云も余りあり。
 萬代も さかえ久しき 八幡山
 あふぐもたかし 神の広まへ
 廻ろつの内、若宮の神輿四ツ、八幡宮の
 神輿三ツを置り。鎌倉將軍以来の
 宝物種々あり。御社を出て左りのかたに、
 あいぜむ明王をへがみ、夫より丸山稻荷、
 此みやしろは鎌足公勸請のよし。坂を

下れば頼朝公の御社有。なほ坂を下りて
十二院の惣門をいづ。昔は二十五ぼさつに
かたどりて廿五院有しが、今は十二院に
なりし由。右の方小袋坂をのぼりて
青梅聖天にまつ。新居の氣んま、れいの
雲慶の作といふ。こゝより山の内へいで、
五山第一の建長寺へまいる。表門左りの方、
長者の七塔の内一塔あり。山門を入て地蔵
堂、佐山地蔵と云。本堂のうしろ、庭前
の池の向ひに松の大樹あり。昔若宮の
御神跡を此まつにたれ給ふとぞ。門を出て
杉が谷弁天に詣づ。弘法大師の御作といふ。
はるかに洞門を出て左の方、浄寿寺へ
まいる。尊氏公御建立のよし。足利家
十三代の御墓有と聞しかど、この日門へ入
事をゆるさず。左りの方なる遥の山の上に、
冷泉為相卿の御はか有と云。山の麓に
山の内の上杉家の屋敷有よし、今は
管領屋敷の名のみ残りてみな畑なり。
右のかたに矢柄地蔵尊立せ給ふ。権五郎
景政の守り本尊と云。爰を過て左の方、

最明寺時頼の^皇はか有。松が岡東慶寺へ
まいる。表門に男禁制の札たてり。此所にて
しばし休らふ。日光御山への例幣使、今宵
鶴が岡へとまらせ給ふとて、この所を過給ふ。
こゝを出て五山第二円覚寺へ参る。はるかに
^上のぼりて大がね有。西洞和尚といふ人の鑄
たてしといふ。本堂釈迦如来、天竺の
かつまが作といふ。爰を出て五山第四淨智寺へ
参る。門の左のかたに五名水の内、かんろ水
あり。豊川は社有。北条時頼の建立と
いふ。此山をたゞに行過れば近道のよし、
小笹おし分つゝ、細き山坂を下り麦畑を
過て、けはい坂に至り、海蔵寺へまいる。この
おくに弘法大師十六の井あり。その道の
かたはらに千代能尾そこぬけの井、また
景清の土の牢など有。源氏山を右に
見て、英勝寺を過、扇が谷の管領屋敷に
いたる。此源氏山は、むかし義家朝臣
坂東の武者を集め給ひし所とかや。
後に伝へて白はた山、源氏山など云よし。
夫より五山第三寿福寺へまいる。此山に

実朝公の御墓あり。巖窟にして唐
草のほりあり。此君の絵かき、ほり給ふと
いふはいぶかし。坂の半にれいの長者の
七塔の内あり。岩屋堂、浄見寺の前を
過て、若宮小路にいたる。此道右の方に、
人丸姫の塚、麦畑の中に松のしるし
あり。はるかに尊氏公の屋敷あと見ゆ。
是も畑なり。ゆきの下大沢へ立寄れば
日暮ぬ。灯火てらしてだんかづら、二の鳥居
を過て、びは橋前より右へ、はせ小路に
いたる。右のかたにはせを翁の碑有。盛久
敷革のあと、松の古木あり。長谷の三ッ橋
屋へ戊の刻近き頃やどる。

第四日 長谷へ腰越へ江の島

廿一日 晴、辰の刻過る頃このやどりを立出、
光則寺へ参る。此寺に日朗・日親両上人
の土の牢有。日蓮上人龍の口の御難の時、
両上人および四条金吾兄弟も此所にて
禁こくせられしとかや。牢の前なる堂に
六人の像あり。門を出て左りのかた、山の頂に
山王の社あり。夫より深沢の三仏へ参る。
昔頼朝公、上総国大野五郎右衛門といふ

第四日

実朝公の御墓あり。巖窟にして唐
草のほりあり。此君の絵かき、ほり給ふと
いふはいぶかし。坂の半にれいの長者の
七塔の内あり。岩屋堂、浄見寺の前を
過て、若宮小路にいたる。此道右の方に、
人丸姫の塚、麦畑の中に松のしるし
あり。はるかに尊氏公の屋敷あと見ゆ。
是も畑なり。ゆきの下大沢へ立寄れば
日暮ぬ。灯火てらしてだんかづら、二の鳥居
を過て、びは橋前より右へ、はせ小路に
いたる。右のかたにはせを翁の碑有。盛久
敷革のあと、松の古木あり。長谷の三ッ橋
屋へ戊の刻近き頃やどる。

第四日

廿一日 晴、辰の刻過る頃このやどりを立出、
光則寺へ参る。此寺に日朗・日親両上人
の土の牢有。日蓮上人龍の口の御難の時、
両上人および四条金吾兄弟も此所にて
禁こくせられしとかや。牢の前なる堂に
六人の像あり。門を出て左りのかた、山の頂に
山王の社あり。夫より深沢の三仏へ参る。
昔頼朝公、上総国大野五郎右衛門といふ

淨善寺・極楽寺へまいる。天正十八年、此
所朱印禁札あり。こゝを出て右のかたに、
弁慶の腰を松ぞゆゑる所と云ふ所あり。
なす。坂をくだれば日蓮上人の袈裟掛松
あり。十一人の塚あり。程なく支度茶屋とて
三軒あり。七里が浜にいつ。右の方、横手が原
の古跡あり。見かへれば由井が浜・袖が浦、
浪の向うよせかへるもいとめづらし。わらはは
あまたむれぬて、海に入、さま／＼のわざを
なす。あやふくもまた興あり。夫より腰越
村に至る。彦根侯御預りの所とかや。
海岸に御台場あり。満福寺へまいる。
義経の腰越状、此寺に納め有しに、僧の
住ねば、今は同じ所なる泉常寺に預けて
あり。こゝにて見侍りぬ。夫より片瀬村龍の
口山へ詣づ。院内に光りの松、うろ内に
妙見大士を安置せり。左りの方、上人の
土の牢、祖師の鑄像を安置せり。本堂は
敷草堂とあり。左りの方に七面の御社
あり。浜辺より海面を見渡すに、風景
殊にすぐれたり。門前に四五軒茶店

参

方

懸

下

出

辺

寄

帰

危

業

部

参

洞

優

あり。こゝよりゆく／＼真砂地にて、ふり
つむ雪をふみ分る心ちす。渚に出て
舟渡りして江の島へ上り、恵比寿屋と
いへるにやどりを定めて、坂をのぼれば、
なかばに下の宮の別当所あり。爰より右の
かたに岩本院、奥の院岩屋の別当所と
いふ。隨身門の前に小池あり、かたはらに、
かへる石とて大きな石有。坂を登りて
三重の塔有。五智如来を安置せりと云。
なほ坂をのぼりて下の宮に詣づ。慈悲上人
の開基といふ。爰より左りへ廻りて上の宮に
詣づ、慈覚大師の開基とかや。此宮の
別当所有。金剛水とて頂に清浄の
水あり。こゝより廻りて茶店二三軒あり。
遠眼鏡をかけ貝細工など商ふ。夫より
原道を過て一の鳥居有。ことに遊行上人の
成就水とて清水井あり。山二つの堺を
地震しらずといふ。里の方になゐありても、
爰よりはたえてゆらずとかや。二三の鳥居を
過ぎて岩屋の本社へまうづ。本社は修理
果たれど、拝殿はいまだ事ならず。左の方に
亀石とて、自然に亀甲のあらはれたる石

降

地

積

上

中

方

登

蛙

云

知

絶

揺

過

未

顯

龜

石

左

右

中

下

上

金

剛

水

と

て

頂

に

清

浄

の

水

あ

り

。

こ

ゝ

よ

り

ゆ

く

／＼

真

砂

地

に

て

、

ふ

り

つ

む

雪

を

ふ

み

分

る

心

ち

す

。

渚

に

出

て

舟

渡

り

し

て

江

の

島

へ

上

り

、

恵

比

寿

屋

と

い

へ

る

に

や

ど

り

を

定

め

て

、

坂

を

の

ぼ

れ

ば

、

な

か

ば

に

下

の

宮

の

別

当

所

あ

り

。

爰

よ

り

右

の

か

た

に

岩

本

院

、

奥

の

院

岩

屋

の

別

当

所

と

い

ふ

。

随

身

門

の

前

に

小

池

あ

り

、

か

た

は

ら

に

、

か

へ

る

石

と

て

大

き

な

る

石

有

。

坂

を

登

り

て

三

重

の

塔

有

。

五

智

如

来

を

安

置

せ

り

と

云

。

な

ほ

坂

を

の

ぼ

り

て

下

の

宮

に

詣

づ

。

慈

悲

上

人

の

開

基

と

い

ふ

。

爰

よ

り

左

り

へ

廻

り

て

上

の

宮

に

詣

づ

、

慈

覚

大

師

の

開

基

と

か

や

。

此

宮

の

別

当

所

有

。

金

剛

水

と

て

頂

に

清

浄

の

水

あ

り

。

こ

ゝ

よ

り

廻

り

て

茶

店

二

三

軒

あ

り

。

遠

眼

鏡

を

か

け

貝

細

工

な

ど

商

ふ

。

夫

よ

り

原

道

を

過

て

一

の

鳥

居

有

。

こ

と

に

遊

行

上

人

の

成

就

水

と

て

清

水

井

あ

り

。

山

二

つ

の

堺

を

地

震

し

ら

ず

と

い

ふ

。

里

の

方

に

な

ゐ

あ

り

て

も

、

爰

よ

り

は

た

え

て

ゆ

ら

ず

と

か

や

。

二

三

の

鳥

居

を

過

ぎ

て

岩

屋

の

ありまゝ坂をおりて海岸なる所を
見渡すと、岩屋の松あり、尚岩山を
下りめぐりて岩屋に至る。奥深く二町
余り有とかや。鳩数多洞の中に巢をかけて、
参詣の人になれたり。留守居の弁天とて
神体有、此所より人毎に松ともして奥に
至る。弘法大師かち水とて清き水あり。
諸神諸ぼさつ鎮座し給ふ。奥の院は
左右共に金胎両部を祭る。日蓮上人
こし懸石などいふもあり。無明の橋少し
もとりて、胎内くぐりをぬけ、上人ねすがた
石といふも有。此岩屋は弘法大師、つむらの
湊より六字の名号をかきし舟板に
果て此所に來り、ひらき給ひしといふ。
頼朝公御遊覧有し時、海士をめして、
貝魚などとしめ給ひしゆゑに、魚飯
石・まな板石などの名ありとかや。こゝに
海人の集り居たるにもとめければ、やがて
うみに入、浪を分てあわび・さざえなど取得て
もて來ぬ。こゝより右に伊豆の山々、左りに
三崎の浦々、また沖の方に大島見ゆ。誠に

あり。夫より坂をおりて海岸にいつ。此所を
見ヶ淵といふ。竜灯の松あり。尚岩山を
下りめぐりて岩屋に至る。奥深く二町
余り有とかや。鳩数多洞の中に巢をかけて、
参詣の人になれたり。留守居の弁天とて
神体有、此所より人毎に松ともして奥に
至る。弘法大師かち水とて清き水あり。
諸神諸ぼさつ鎮座し給ふ。奥の院は
左右共に金胎両部を祭る。日蓮上人
こし懸石などいふもあり。無明の橋少し
もとりて、胎内くぐりをぬけ、上人ねすがた
石といふも有。此岩屋は弘法大師、つむらの
湊より六字の名号をかきし舟板に
果て此所に來り、ひらき給ひしといふ。
頼朝公御遊覧有し時、海士をめして、
貝魚などとしめ給ひしゆゑに、魚飯
石・まな板石などの名ありとかや。こゝに
海人の集り居たるにもとめければ、やがて
うみに入、浪を分てあわび・さざえなど取得て
もて來ぬ。こゝより右に伊豆の山々、左りに
三崎の浦々、また沖の方に大島見ゆ。誠に

細工物などをととのへ、恵比寿家に立寄て、
夫より嶋をはなれ。此時又小雨降り出
たり。渡し場を過て片瀬村、すは両社の
前より、同じ所の渡しをこへ、石上村に出て
藤沢に至る。みなと屋といへるにて休らふ。
遊行寺へまいる。開山は一遍上人とかや。
仁王門を入て左りかたに方丈、右なる坂を
のぼれば小栗満重の堂有。宝物種々
あり。主従十一人のはか、照手姫のしるし、又
鬼鹿毛を馬頭観世音とあがめ、かたはらに
しるし有。こゝを出て松原を過、戸塚に
いたる。鎌倉への追分・長いも坂・焼餅ざか
などを過て、むさし・さがみの堺木にて休らひ、
程ヶ谷の並岡といへるに夜に入てやどりぬ。

第六日 保土ヶ谷〜江戸

廿三日 曇、辰の刻過る頃、やどりを
神奈川の台にてしばし休らひ、川崎、
六郷をこえて、大森なる山本にて支度
ととのへ、それより品川を過ハッ山にてやすみ、
泉岳寺へまいり、田町なる八幡の社に詣で、
夕暮の頃我家にはかへりぬ。

第六日

細工物などをととのへ、恵比寿家に立寄て、
夫より嶋をはなれ。此時又小雨降り出
たり。渡し場を過て片瀬村、すは両社の
前より、同じ所の渡しをこへ、石上村に出て
藤沢に至る。みなと屋といへるにて休らふ。
遊行寺へまいる。開山は一遍上人とかや。
仁王門を入て左りかたに方丈、右なる坂を
のぼれば小栗満重の堂有。宝物種々
あり。主従十一人のはか、照手姫のしるし、又
鬼鹿毛を馬頭観世音とあがめ、かたはらに
しるし有。こゝを出て松原を過、戸塚に
いたる。鎌倉への追分・長いも坂・焼餅ざか
などを過て、むさし・さがみの堺木にて休らひ、
程ヶ谷の並岡といへるに夜に入てやどりぬ。

第六日

廿三日 曇、辰の刻過る頃、やどりを
神奈川の台にてしばし休らひ、川崎、
六郷をこえて、大森なる山本にて支度
ととのへ、それより品川を過ハッ山にてやすみ、
泉岳寺へまいり、田町なる八幡の社に詣で、
夕暮の頃我家にはかへりぬ。

わが宿にけふたちかへる旅衣

あまの嬉しさ

(あとがき)

ふたつたのちのちまたはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ
あまの嬉しさはもはやあまの嬉しさ

いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ
いふべき事ありしはあまの嬉しさ

わが宿にけふたちかへる旅衣

あまの嬉しさ

あとがき

こは、道のゆくての口すさみ、所につけたる
あそび・たはむれなど、いづれも其まことを
しるし、はた、時代の路先のおぼつかなき
ことども、道の辺のひな人の物がたり、
あるは何ない子どもいふまゝを書つけ、
さるは後見むをりの思い出にとて。

跋文

いにし年、李院君の木曾道中の旅日記のはし
書せし事ありしに、こたひ内君江の嶋詣ふでの
旅日記の末に、己が文を飄迺屋のぬしもて
乞ひ給ふ。其旅日記をうら／＼見侍るに、名處
／＼の歌さへ書ひつけて、目のあたり景色
を見るごとくいと／＼面白う覺へける。李院君は
五七五の俳句・され歌の滑稽を宗とし、
内君は景色をつばらに記して歌よみ給ふ。
夫婦引ありのひじりの教へにかなひて、
口ふたの中、むつまじき家のいやさかゆへしる
しなるべし。はし書しえにしあれば又巻の末に
文しるしぬるは、冬尾調ふ嬉しさに、老も拙も
忘れて筆を走らす事しかり。

安政乙卯のとし仲夏 八十翁 朴園陳人